

高木 智見

先秦の社会と思想

— 中国文化の核心 —



創文社刊

〔たかぎ・さとみ〕1955年生まれ。名古屋大学大学院博士課程修了。天津・南開大学、上海・復旦大学に留学（1979-82）。山口大学人文学部助教授をへて、現在、同教授。

〔論文〕「内藤湖南の歴史認識とその背景」（『内藤湖南の世界』河合文化教育研究所，2001），「楊寛」（『20世紀の歴史家たち』刀水書房，1999），「君子の交わり，君子の戦い」（『洗練と粗野』東京大学出版会，1995）

〔訳書〕『歴史激流 楊寛自伝』（東京大学出版会，1995），『20世紀の中国考古学』（日本エディタースクール，2002）



中国学芸叢書

(11)

〔先秦の社会と思想〕

二〇〇一年二月二〇日
第一刷印刷
第一刷発行

著 者 高 木 智 見

発 行 者 久 保 井 浩 俊

発 行 所 株式会社 創 文 社

〒107-0063 東京都千代田区麹町二丁目七番五号 電話 03-3233-7100

ISBN4-423-19401-5
Printed in Japan

精興社印刷
鈴木製本所

目次

はじめに——本書の目的と立場

第一節 先秦とはいかなる時代か、いかに理解すべきか

第二節 史料について

第一部 血族社会の世界観

問題の提示

第一章 古代人と髪

第一節 髪と刑罰・兵士俑の髪型

第二節 髪 の 機 能

第三節 髪の意味

第四節 原中国における髪の意味

まとめ

三

三六

三九

四四

四九

六五

六九

第二部 『老子』思想の歴史的研究

問題の提示

第一章 『老子』思想の本質とその背景

第一節 『老子』の本質

第二節 再読「鄭伯、段に鄢に克つ」

第三節 『老子』的処世の遍在

第四節 范氏一族の処世

第五節 支配層の意志決定

まとめ

第二章 歴史と『老子』

第一節 歴史とは

第二節 他族の歴史の教訓

第三節 鑑としての歴史・のっとるべき善

第四節 敬の処世

第五節 敬と『老子』

一七

一八

一八

一九

二〇

二〇

二二

二六

二七

二七

二五

二五

二六

二八

第六節	敬の具体化	二八七
第七節	歴史の事実の抽象化と『老子』思想	二九六
第八節	『老子』的思想の遍在	三〇一
まとめ		三三三
第三章	天道と道	三五
第一節	史官なるもの	三五
第二節	道と『老子』	三七
第三節	史官の直筆	三七
第四節	シャーマンから史官へ——夏后啓とその子孫	三九
まとめ		三八三
おわりに		三八五
あとがき		三九七
索引		1 11

先秦の社会と思想——中国文化の核心

はじめに

——本書の目的と立場——

まず、本書『先秦の社会と思想』が扱う範囲と対象を明確にし、それを論ずる意義について述べておきたい。

「先秦」とは、読んで字の如く秦王朝に先行する時代を指し、その上限はどこまでも遡及可能である。本書では、必要に応じて新石器時代後期の龍山文化期にも言及することは有るが、基本的には夏代に相当する時代から戦国時代まで、絶対年代で言えば、前二〇〇〇年頃から前二〇〇年前後のほぼ二千年間を範囲とする。

次に「社会と思想」であるが、これまた文字通り、当該時代の社会のあり方とそれに根ざした思想の意である。この場合の思想は、たとえば諸子百家などの言説一般を意味するのではなく、そうした思想家や思想そのものを生み出した時代や社会の、より日常的、基層的なものの考え方、人々の心のあるかたを指す。つまり上述のほぼ二千年間における古代中国社会の実態と、その中で生きかつ死んでいった人々の生活感覚、あるいは彼らの価値観、世界観とでも表現すべきものについての私の見方を提示したい。諸子百家の思想に関する研究も、それらについての明確な見通しを踏まえたうえで行われるべきである、というのが私の考えである。

はじめに

次に、そのような「先秦の社会と思想」を研究することは、中国文化を理解するうえでいかなる意味を有するのか。これは結局のところ、先秦という時代が中国史全体の中で如何なる位置を占めるのかという問題にはかならない。そこで以下、蘇秉琦、梁啓超、柳詒徵、楊寬など二〇世紀中国を代表する研究者達の先秦時代観を見ておこう。

中国文化のいわゆる「多元一体」構造説で広く知られる考古学者、蘇秉琦は、その著書『華人・龍的伝人・中国人』（遼寧大学出版社、一九九四年）において、中国の歴史を次のように概括している。すなわち中国文化は、百万年以上前の旧石器文化にその根源を有し、また中国文明の始動は、定着農耕によって原始村落の形成が始まる前七千年あたりに見られる。

さらに前三千年前後には、地域文化の発展のもと、中国各地に、それ以前の氏族集落に比べて、より安定のかつ独立的な高次の政治勢力が続々と誕生するようになる。すなわち早期の城壁都市国家、「古国」である。これ以降の一千年が、考古学的には龍山文化期に、また古史伝承では万邦が林立したとされる堯舜時代にあたり、いわゆる中原漢民族と周辺の蛮、夷、戎、狄が相互に影響を与えつつ並存する時代であった。

そうして前二千年には、いくつかの「古国」をたばねて一方（特定の地域）に覇をとなえる「方国」が出現する。いわゆる夏殷周の三代においては、そうした多くの「方国」が共存しつつ、それぞれが成熟、発展しながら、一つの「王朝」のもとに、ゆるやかな連邦形式の中国あるいは天下を構成していた。その後、春秋戦国時代の大変動を経て、かつての「方国」を「郡」として包摂し、諸他の民族を統一した中央集権的帝国としての秦漢王朝が成立する。それ以後、清まで基本的にはこの体制が継続する。

このように前三千年から現在に至る、五千年の中国史を、古国、方国、帝国の三段階で捉えようとする蘇

氏の見方によれば、先秦時代は、古国と万国の時代にあたり、中華帝国形成に至る萌芽期、あるいは準備期として理解できる。

二〇世紀初頭、梁啓超は、その論文「中国史叙論」第八節「時代区分」において、古典文献に関する該博な知識と自らおよび自らの生きる世界に対する「熱い眼差し」に基づき、中国史を上世史、中世史、近世史に分けたうえで以下のように概括している。すなわち、上世史としての先秦時代は、中国民族が独自に発達、競争、団結した時代であり、「中国の中国」と位置づけることができる。この時代の特徴は、土着民族を征服した有力者やその功臣、子弟が重要地点に割拠する、いわゆる封建体制が確立されたことにあるとする。これに続く中世史は、秦の統一から乾隆帝の治世まで約二千年間の「アジアの中国」、すなわち中国民族がアジアの諸民族と頻繁に交流し、激しく争った時代であり、中央集権制がしだいに完備し、君主専制体制の全盛期として位置づけられる。

また近世史は、乾隆末年から今日（梁啓超の現代）に至る「世界の中国」、すなわち中国民族がアジアの全民族と力を合わせて、西欧と交渉・競合する時代であると位置づけられる。君主専制体制が崩壊し、立憲政治体制が確立することに伴って生ずる内外の諸変動は、すべて過去の二千年間には未経験であり、自ずから別の時代として区分する必要があるとする。

こうした梁氏の見方によれば、先秦時代は、中国が中国のみで独自の世界を作りあげていた時代ということになる。

次に近年、中国文明と西洋文明のあるべき融合・統一をいかにして実現するかという課題が明確になるにつれ、再評価の呼び声が高くなっている歴史学者・柳詒徴は、『中国文化史』（正中書局、一九四八年）におい

て、やはり中国史を三区分して以下の如く述べている。すなわち、太古より漢代までを「上古」と呼び、中国民族が自らの創造力に基づき、部族的な段階から出発して国家を形成し、独自の文化を作り上げた時期と規定する。また後漢から明末までを「中世」とし、インド文明が流入して中国固有の文化と抵触・融合する時期であるとする。さらに、明末から民国初年までが「近世」であり、中国文化、インド文化が双方ともに衰退に向かい、新たに流入した西洋の学術思想、宗教、法律、制度と相互に衝突、さらには融合する時期であるとしている。

柳氏の見方は梁氏に近く、先秦時代は中国独自の文化の形成期となる。

以上に見た三碩学の先秦時代観は、中華帝国の準備期、中国の中国、あるいは独自文化の形成期などと、それぞれの視角から為された表現と意味づけは異なるが、先秦時代が中国文化の原基的な姿が形成された時代であるという点においては一致している。このあたりを、特に戦国時代に焦点を当てて明確に論じているのが楊寛『戦国史』（台湾商務印書館、一九九七年）である。

師、呂思勉の説を敷衍した楊氏によれば、戦国時代は、中華帝国の形成期であり、秦漢以降の二千年にわたり、歴代王朝は基本的に、この戦国時代に形成された諸々の構造を継承した。したがって、政治上経済上の重要な諸制度は、すべて戦国時代の諸制度を踏襲したうえで改変を加えたものとなっている。同様に、歴代の学術や文化も、戦国時代のそれを継承しつつ発展させたものと理解できる。それ故、戦国時代史の広範かつ深遠な影響は、現代にまで及んでいるとする。

本書では以上の諸先学の見解を受けて、中国史全体の中での先秦時代の位置づけを明確にするため、以下のような時代区分を行う。すなわち夏殷周の三代までを「原中国」とし、秦から清までを「伝統中国」、民国

以降を「現代中国」と呼ぶ。ただし、原中国から伝統中国の間には春秋戦国時代という過渡期の段階がある。しかも、一般には、春秋戦国として一括されるが、後述（本書一六三頁）の如く、古くは漢の劉向「校戦国策書録」、また明末清初の顧炎武「周末風俗」（『日知録』卷一三）、さらには現代の郭沫若『奴隸制時代』（『郭沫若全集』歴史編三、人民出版社、一九八三年）が強調するように、実際には春秋時代と、戦国時代には大きな違いが存在する。それ故、過渡期としての春秋戦国時代について、より厳密な区分をすると次のようになる。つまり春秋時代は、それ以前の時代の特色に強く規定された、いわば原中国の完成期・最末期としてとらえるべきであり、一方、戦国時代は伝統中国の論理が形成され始め、その開始期として位置づけることができる。以上を簡略に示すところなる。

夏殷西周春秋（前二〇〇〇～四五〇） 原中国

戦国と清（前四五〇～一九一） 伝統中国

民国（一九一二～） 現代中国

したがって本書で言う先秦時代とは、一五〇〇年にわたる原中国の歴史に伝統中国の開始期である戦国時代を含めた時代ということになる。

なお、ここに用いる原中国なる用語は、小倉芳彦氏の論著から拝借した。ただし、その意味内容は筆者独自のものである。すなわち小倉氏は、『中国古代政治思想研究』（青木書店、一九七〇年）において、戦国・秦漢時代に形成され一九世紀に至るまでの二千年間持続した伝統的な中国社会を、「その否定の上でなければ中国」（現代中国の意）が成立し得ないもの、にもかかわらずそれなしには中国も成立し得なかったもの」（同書、三五〇頁）と位置づけた上で、「原中国」と呼び、現代中国研究と「原中国」研究とが相互に補

完的な關係を保ちつつ進められるべきことを主張された。これに対し、本書では、先秦時代が中国史全体の流れの中で如何なる意味を有するのかを明確にするために、春秋までを原中国、戦国から清末、すなわち小倉氏のいわゆる「原中国」にあたる時代を伝統中国と呼ぶこととする。

上述の如く、先秦時代を、夏から春秋までの原中国と、伝統中国の開始期としての戦国時代として規定するならば、その思想を研究する意味が明確になってくる。このうち戦国時代については楊寛氏の考えに尽きている。そこで以下には、研究対象としての原中国が有する意味について、二点にわたって述べる。

まず第一に、原中国は、一五〇〇年にわたる歴史の自己運動の結果、春秋を境として崩壊し、新たな社会のあり方としての伝統中国を創出する。そうして楊氏の言うように、確かに伝統中国の開始期としての戦国時代の文化は、遠く現在まで影響を与えている。しかし、言うまでもなく、戦国の文化は、それに先行する春秋以前の歴史的展開の結果として生み出されたものである。つまり、戦国文化は、たとえ克服あるいは否定という面が強かったにせよ、春秋以前の文化の影響のもとに出現したことは間違いない。たとえば本書第二部で述べるように、老子や孔子は、彼らの思想を原中国の社会の中で創造し、それが戦国以降すなわち伝統中国開始期に後学達によって様々な形で受容、継承、敷衍、否定、発展させられた。つまり道家、儒家ともにその淵源は、原中国にあるのである。

こうして諸子百家のルーツが、原中国にあることを確認すれば、『漢書』芸文志の「諸子の学が王官（西周王朝の各種官職）に出る」という主張に対しても、無論、内容の具体的検討は必要であるが、かつての胡適「諸子不出於王官論」（『胡適文存』一集、亜東図書館、一九二二年）の如く、全く根拠のない「漢儒による附会揣測の辞」と決めつけることはできなくなる。かくて、戦国文化を真に理解するには、さらにその戦国文

化に規定された伝統中国を理解するためには、春秋以前の文化に関する理解が不可欠ということになる。

次に第二点。指摘するまでもなく、歴史には旧来の伝統を克服・断絶する一方で、継承・持続する面がある。確かに春秋と戦国を境にして、原中国の社会構造は一変する。しかし、それによって原中国の諸事象、諸制度の一切が跡形もなく消滅するということにはならなかった。むしろ、もはや現実には存在不可能になったそれらの事象、制度が、却って、あるべき理念として伝統中国に受け入れられることになったのである。換言すれば、後の伝統中国二千年を通じて、原中国という時代は、聖人による理想的な政治や社会のあり方が実現していた時代と見なされ、いわば観念の上で伝統中国の人々の生活を、つまりはその心性を規定し続けたのである。たとえば、秦漢から清末までの伝統中国を通じて、政治体制に破綻が生じた時に必ず繰り返された封建と郡県の優劣に関する論争は、結局のところ、原中国の政治体制へ回帰することの是非に関する議論である。そうした議論が、あれほど頻繁に行われた究極的な要因は、血族意識の継続的存在にあると考えられる。すなわち一般に中国社会の通時的な特徴とされる家族主義の背後には、血族意識や祖先観念があり、それらは原中国から現代中国に至るまで、その意味や形を変えながら、綿々として中国の人々を規定し続けてきたのである。あの文化大革命期に、いわゆる「紅五類」、「黒五類」など、父母の出身階級によって、子弟の階級が自動的に決まる血統論が堂々と唱えられたことは、古来よりの血縁観念の継続を物語る象徴的な事例である。

中国固有の生活規範、あるいは社会的ならびに政治的規範とでも表現すべき礼についても、その継続的な存在は、秦恵田『五礼通考』を通覧すればまさに一目瞭然である。経書に見える五礼（吉礼、嘉礼、賓礼、軍礼、凶礼）、すなわち原中国以来の諸規範が、時代により様々な改変を加えられながらも、伝統中国の人々

を根底から規定していたのである。それはまた、西周王朝の理念的官僚制の枠組み、ならびに政治規範を記した書物『周礼』——すなわち書物としての成立年代については別に検討する必要があるとしても、その核心部分が原中国に遡ることは間違いない『周礼』——が、後世の中国文化に大きな影響を与え続けたという事実によっても確認できる。周知の如く、伝統中国の官僚制や都市計画は基本的に『周礼』の理念を踏襲していた。また、それは王莽や王安石の政治理念などの顕著な例は言うに及ばず、歴代王朝の政策立案の基本方針として、さらには政治改革や革命の拠り所として、伝統中国を通じて尊ばれ続けた。

このほか詳述はひかえるが、天地、陰陽、五行、靈魂、自然などの諸觀念についても、その本質的な部分で原中国以来の継続を指摘することができる。

以上を要するに、伝統中国の人々が希求した価値の根源は、多くの場合、原中国にまで遡り、これこそ尚古主義が根強く存在する理由であると考えられる。このような意味において、原中国に対する理解は、伝統中国を真に理解するうえで不可欠なのである。

つまり、小さく限定して言えば、伝統中国の開始期である戦国時代の諸子百家の思想を歴史的文脈に位置づけて理解するには、先行する原中国の精神世界を明らかにする必要がある。また、視野を大きく広げて言うならば、現代中国は、自らの文化と西欧的価値観との新たな統合の形を模索しつつあり、その前提として中国文化の本質の解明がまさに焦眉の課題となっている。そのためにも、中国の中国たる所以が形成された原中国の研究は不可欠なのである。以上、先秦思想（原中国ならびに戦国時代の思想）を研究する意義について述べたが、それでは先秦時代とは、一体どのような時代であったのか。